

鳥井さんのことなど

中谷宇吉郎

青空文庫

サントリーの鳥井信治郎さんとは、もう三十年越しのお近付きを願っている。この鳥井さんと私との話には、少し美談めいたところがあるので、今まであまり書いたことがなかった。美談というものは、公表すべきものではないそうである。しかし三十年といえ、たいへんな年月であるから、もう今では、遠い過去の話として、書いてもよいであろう。

ことの起りは、私が四高の三年生になった時の話である。校長は溝淵進馬先生で、当時天下の名校長とうたわれていた人である。土佐の出身で、浜口雄幸の親友の一人であった。浜口さんといっても今では知らない人もあろうが、当時ライオン宰相とあだ名さ

れたくらいに剛直清廉な大政治家である。総理大臣の現職で刺客に襲われ、それがもとになって、間もなく亡くなられた。

溝淵さんも、浜口さんそのままのような人で、剛直で誠実な教育者として知られていた。生徒たちには、まことに恐ろしい先生であつたが、皆敬慕はしていた。私は弓術部の主将をしていたが、対校試合の華かだった時代だったのでその用事もあつて、時々溝淵先生のところへ顔を出していた。それで少しは個人的な話をする機会もあつた。

私の家では、父が早く亡くなつて、母が一人で、田舎で呉服屋をしていた。それで私と後に考古学をやった弟とを教育するのは、なかなかたいへんであつた。溝淵先生にも、そういう話をしたか

どうかは忘れたが、或る日、先生から、大学へ行つてからの学資について、相談があつた。

関西の実業家で、全くの匿名で、学費を出したいという人があ
るが、それを貰わないか、という話なのである。毎年各高等学校
の校長に依頼して、各校から一名宛、そういう学生の推挙を頼ま
れるのだそうである。金額は月額五十円で、三年間。返済の義務
はもちろんなく、その実業家の名前は、本人にも知らさない、と
いうのである。それでは返済のしようもないわけである。

当時の五十円といえば、今の二万円くらいに相当するであろう。
一流の下宿にいて、相当本も買い、時には映画を見たり、コー
ヒーをのんだりしても、五十円あれば充分という時代であつた。

あまり結構な話で、少し気味悪いくらいであつたが、悪びれずに、有難く頂戴することにした。

ところで東大の物理学科に入り、下谷の池の端近くに住むことになったら、そこへ毎月、月末になると、五十円の為替が、きちんきちんと送られて来る。差出人は、大阪毎日新聞社の〇氏の名前になつていたが、〇氏からは、この金は私から出すものではなく、単に送金の世話をしているだけだから、礼状は要らない、と断つて来た。そして封筒の中には、毎回印刷した受領書がはいっていた。それに署名して〇氏のところへ送るだけでよいのである。そういうことが、一年近く続いた後、或る月から、差出人が、鳥井信治郎という名前に変つた。そして今後の受領書は、私の方

へ送ってくれと書き添えてあった。その頃は鳥井さんの名前は全然知らなかったので、同じ新聞社の他の人が、この世話をするこ
とになったのだろうくらいに、簡単に考えていた。

ところが大学の二年になった年の九月、関東の大震災に遭った。
大学へはいると同時に、母たちも下宿へ移って来ていたが、その
家は全焼、持ち出した荷物もほとんど焼いて、風呂敷包み二つく
らいになってしまった。大学も震災を受けて、当分開講の見込み
もなかった。それでいったん郷里に帰ることになって、途中大阪
の友人の家にしばらく足を停めた。

東京を立つ前に、いろいろな流言蜚語がとんでいた。関西にも
被害があり、それに帝都の全滅で、関西の実業界も間接の大損害

を受け日本の実業界は、当分立ち直ることが出来ないだろう、という風説が伝わっていた。事実、あの大地震災に伴なった当時の混乱は、太平洋戦争中の大空襲を遥かに上廻るものであった。いわば全関東が、同時に空襲を受けたような騒ぎであつた。

それで、学資を出して貰っていた匿名の実業家の人からも、今後はそういう恩恵を続けて受けることは出来ないものと、簡単に諦めた。しかし折角大阪へ来たのであるから、今までのお礼を兼ねて、震災の見舞かたがた訪ねてみることにした。

そのため一応取次をして貰っている鳥井氏に会おうと思つて、川辺郡川西村字何とかいうアドレスを頼りに、探して行つた。川西村というのは、直ぐわかつた。秋の晴れた日であつて、柿の木

のある富裕らしい農家が、たくさん並んでいた。当時のあのあたりは、まだ静かな農村であつた。実業界や新聞界に關係のある人が住むにしては、まるで気配のちがつた土地であつた。

方々探したが、アドレスにある字がなかなか見当らない。散々「農村地域」を歩き廻つて、最後に出たのが、阪急の雲雀丘であつた。そして雲雀丘にある鳥井さんの現在の邸宅が、川西村字何とかとわかつて、びつくりした。

鳥井さんは幸い在宅で、すぐ会うことが出来た。そして匿名の実業家が鳥井さん自身であること、その鳥井さんは、赤玉ポートワインやサントリーの主人であることなどを、初めて知つた。来意を述べると、鳥井さんは、「そういう心配は全然要らない。大

分被害はあったが、君たちの学資などは問題ではない。それよりも気を落さないで、しっかり勉強なさい」と励まされた。

震災を受けてからは、とくにこの学資は大いに有難かった。お蔭で無事大学を出て、理研の寺田研究室にはいり、やっと細々ながら安定した研究生生活の緒につくことが出来た。それで卒業と就職との報告を兼ねて、大阪へ出かけて行き、雲雀丘へ挨拶に伺った。大正十四年の春のことである。

今までに貰った学資は、初めから返済の義務はないと聞かされていたが、匿名の本人がわかった以上、一応意向をきいてみる必要がある。その点に話が触れたら、鳥井さんは、ちよつと真面目な顔付になって、述懐めいた口ぶりで話し出された。

「わたしは今金も相当出来て、皆さんに少しくらいの御手伝いも出来るようになったが、もとは非常に貧乏だった。しかしこの財産は、自分で働いて儲けたものとは思わない。これは天から授かったものと思っっている。それで君もあの学資は、天から授かったものと思っいたらよい。返済の意志があつたら、天へお返しなさい」という意味のことを言われた。もちろん大阪弁で、その方がもっと味があるのだが、どうも巧く表わせない。

今の若いインテリの人たちには、「返済の意志があつたら、天へお返しなさい」などという言葉は、浪花節的に聞えるかもしれないが、三十年前の日本には、こういう人たちもいたのである。もつとも鳥井さんは、今でも健在であるが。

その後、北海道大学へ勤めることになったので、大阪へは滅多に行かなかった。しかし関西に学会があつた機会とか、満州の凍土調査の往き帰りとかに、時々雲雀丘を訪ね、鳥井さんが、老いてますます元気なことを祝福した。その間、サントリーは、非常な勢いで売れ出し、社運がますます隆盛になつて行つたことは、私たちのような門外漢にも、よくわかつた。

そのうちに、戦争になつた。私は北海道のニセコ山頂で、飛行機の着氷防止の研究をすることになった。国家総動員法による戦時研究である。ニセコの山頂は、着氷の発生に最も適した気象条件になっている。即ち、寒さと強風と濃霧と、三拍子揃つたところである。人間の生活には最悪の条件が、着氷の研究には最良の

条件なのであるから、話は厄介である。気温零下二十度、風速四十メートルがそう珍しくないこの山頂で、私たちは三冬を過ごした。この間鳥井さんのところから、サントリーの一ダース箱が時々届いた。山頂の冬籠りにはそれが非常に有難かった。もうその頃は、サントリーなど滅多に手に入らぬ時代であつた。

この研究が始まつた頃、即ち戦争の初期頃、東京で時々鳥井さんに会つた。鳥井さんの会社の方でも、醸造装置を転用して、軍事用の燃料か何かをつくつておられたので、東京へは始終出て来られたようであつた。

その頃鳥井さんは、ちよつと健康を損ねて、東京で武見国手の診療を受けておられた。この武見さんには、私も前に難病の胃周

囲炎と肝臓ジストマとを治してもらい、それ以来親しくしていたので、ここでも、時々鳥井さんに会った、

武見さんは、牧野伸顕伯の姻戚にあたるので、その紹介で、松濤にあった牧野伯の家へ時々遊びに行ったことがある。牧野伯は、戦争の前途を、初めから非常に心配されていた。

とくに日本の科学や技術は、基礎が非常に浅いから、東条流の科学振興策では駄目だと、常々言っておられた。或る晩など、降下の宮様を二、三人まじえた七、八十人のお客に、私の科学映画「雪の結晶」を見せられたことがある。これは国際雪氷協会の大会に送った英語版のものであった。「バドリオ」として東条の監視の下にあった伯が、戦争中に、大勢の客を集めて、英語版の映

画を見せるといふようなことは、相当な勇気が必要とする。しかし伯は、そういうことは、平氣であつた。

鳥井さんも、その頃、時々牧野伯のところを訪ねておられた。或る晩、伯の家で、鳥井さんと同席したことがある。伯には、前に「匿名の実業家」としての鳥井さんの話をしたことがあつた。伯は鳥井さんに「君もなかなかしやれたことをするそうだね。中谷君から聞きましたよ」と言われた。鳥井さんは、頭を掻きながら「到頭、露頭致しまして」と苦笑しておられた。

戦争の数々の暗い話の中では、これなどが懐かしい思い出の一つである。

（昭和二十九年）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎集 第七卷」岩波書店

2001（平成13）年4月5日第1刷発行

底本の親本：「中谷宇吉郎随筆選集 第三卷」朝日新聞社

1966（昭和41）年10月20日

入力：kompass

校正：砂場清隆

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥井さんのことなど

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>